

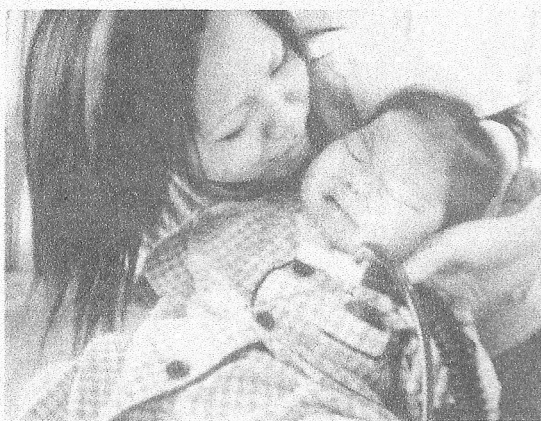
# 「呼吸器合えば 息子救えた」

## 救急と在宅医療連携問う

奈良

### 心身障害11歳 母、消防相手に民事調停へ

重い心身障害を抱えた奈良県田原本町の男児（当時11歳）が昨年8月、自宅で容体が悪化し、救急搬送された直後に亡くなった。生まれてから3年間入院した後、母親が「家族で暮らしたい」と在宅で介護を続けて8年。母親は、救急隊員の処置が適切だったかを明らかにするため、近く民事調停を葛城簡裁に申し立てる。在宅医療に欠かせない救急態勢のあり方を問いたいという。（守川雄一郎）



亡くなったのは特別支援学校の小学部6年だった山本瑛央君。2002年2月の出生時に食道閉鎖と診断され、大病院に入院した。先天性心疾患や気管軟化症などの手術を10回以上受け、症状が安定した05年4月以降、母めぐみさん（39）が自宅で介護していた。退院前には大病院の主

治医が自宅近くの磯城消防署で症状の特徴や搬送時の注意点を文書と口頭で説明。「呼吸状態の悪化が考えられる。救急要請があれば速やかに大病院へ搬送してほしい」と依頼していた。瑛央君は、脳性まひや先天性股関節脱臼なども患い、会話は難しく、自宅ではベッドで過ごしながら、また幼い頃の瑛央君（手前）を抱くめぐみさん。「自宅では24時間、瑛央の命を守ってきたつもり」と語る（めぐみさん提供）

磯城消防署の救急隊員3人が駆けつけたが、大人用の人工呼吸器しか持参していなかった。3人のうち1人は救急救命士の資格を持っていた。瑛央君の身長は約1歳で、標準的な男児3〜4歳程度。それでも救急隊員は大人用の人工呼吸器を使い、途中で気管につながれたチューブが外れることもあった。瑛央君は通報から約40分

後に大病院へ搬送されたが、翌5日午前1時55分、脱水症で死亡した。めぐみさんは「救急搬送の際に大人用の人工呼吸器を見たのは初めて。サイズが合わず、酸素が肺に届かなかったのではないかと。消防は子ども用が必要とわかってははず」と話す。磯城消防署からは「11歳と聞いて大人用が適当と判断した。処置に問題はない」と説明されたが、納得できなかった。訴訟も考えたが、市民から選ばれた調停委員や裁判官らと話し合いで解決を目指す民事調停を選

択。同署を管轄する泉広域消防組合に損害賠償を求める形で申し立てる。消防の責任が認められた場合には賠償額が改めて話し合われる。めぐみさんは「在宅医療を受ける患者や家族が安心して暮らせるような救急態勢でなければ意味がない」と訴えている。磯城消防署の北脇修一署長は取材に「大人用でも使用法を工夫して必要な処置ができた。チューブが外れた状況は不明だが適切に対応した」と説明している。

日本重症心身障害福祉協会によると、重症心身障害の幼児から高校生で在宅医療を受けているのは、推計で1万5000人を超える。短期入所施設の利用実績から、この十数年で急増しているとみられる。ただ、容体が悪化した緊急時に受け入れ先が見つからなかったり、搬送先をたらい回しになったりするケースが後を絶たないという。

## 在宅1万人支援体制を

症状や緊急時の対応に関する情報を共有し、地域社会で患者や家族を支える環境整備を進めている。大阪市は今年から「医療コードイネート事業」を開始。市の委託を受けた医師らが、登録患者の容体が急変した際に応急処置を指示したり、医療機関への受け入れを調整したりする。厚労省障害福祉課の担当者は「自宅暮らし、地域の学校に通学することを望む患者や家族は確実に増えている。速やかに救急搬送され、治療できる態勢が不可欠だ」と指摘している。